

鳥が種蒔きをした

牧師 山本 護

教会の葡萄の木、剪定せず施肥もせず、駐車場の垣根になっています。この晩夏、熟した粒を一つ二つ選んで食べていました。酸っぱく、渋く、ほんのり甘く、野趣あっておいしい。ある日、未熟な実まですっかり消えています。あっ、鳥か。毎年のもので残念なわけでもなく、鳥の糞に混じった葡萄の種が見知らぬどこかに発芽するイメージが浮かぶ。鳥を利用してかなり遠くまで旅をする植物の生存戦略。ここで性懲りもなく駄句ひとつ。「葡萄のたね未知の祖国に鳥がまき」。

「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった(マロ 4:3~4)。ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった(4:7)」。こうならぬよう「良い土地に蒔いてたくさん収穫しなさい(4:8)」という戒め。あれっ、イエスがこんな功利的なことを言うのか、意外です。とはいえ教会のある局面においては、「良い土地」を見極めて種蒔くことも必要なのでしょう。



私たちはどこが良い土地で何が良い機会なのかを知りません。「朝、種を蒔け、夜にも手を休めるな。実を結ぶのはあれかこれか、それとも両方なのか、分からないのだから(コリ 11:6)」という感じです。とはいえ慣れ親しんだ「思いつき」に居直ることも傲慢じゃないか。これまで思いつきで来たから、良い土地に種を蒔く慎重さが求められるのかもしれませんが。宣教の振り子が「良い土地」に傾斜したなら、次には「思いつき」の宣教にゆり戻る。そしてまた良い土地にゆり返す。このようにスウィングする教会でありたい。

「葡萄のたね未知の祖国に鳥がまき」。何回か葡萄をつまんで食べたのだから、もうこれで充分。あとは鳥たちよ、どこでも見知らぬ土地へ種を運んでくれ。鳥が食べた葡萄と同じく「茨の中に落ちた種(マロ 4:7)」もまた重要。今は茨に覆われて十分に成長できなくても、時が来て状況が変われば、内に貯めた生命を大きく芽吹かせることになるでしょう。

私たちは種を蒔く。良い土地はこのあたりか、と「思いつき」で種を蒔きます。思いつきのおかげで鳥も食べる、茨の中にも落ちる。穀物の収穫なら「三十倍、六十倍、百倍(4:8)」もありえましょう。でも教会の葡萄は収穫などせず、酔狂な信徒か、あるいは疲れている迷い人が、熟れた数粒をつまんで食べられればいい。Ω